

来の調査のため)、の三つである。

滞在一日目、私は大学に行き非文字資料研究センターのスタッフの方々への挨拶を済ませ、宿泊先のチェックインを行った。その後私は、指導教授でありコミックの歴史に詳しいステファン・ブッヘンベルグ教授に会い、私が感じている疑問に答えていただくなど多くのことを説明してもらい、日本のコミックだけでなく、文化についても調査するとよいと指導してもらった。

その日はそのまま非文字資料研究センターに残り、「カワイイ」と「バサラ」の研究を行った。その作業はこれら二つの美的価値観を、通りやお店、ショーケース、そして日本全体の社会のなかで見つける準備段階として、より理解を深めるために重要なものであった。

「かわいい」の元の形は「かほはゆし」であり、それが「かわゆし」に短縮され、口語で「かわゆい」となり、第二次世界大戦後頃までに最終的に「かわいい」になったことが、これらの研究のなかで分かった。その意味は「哀れみの感情」「深い同情」「もろさ」などを意味するが、主には「かわいい人」「優美な」「壊れやすい」といった意味で使われる。しかし別の種類の「かわいい」もあり、それは「キモかわいい」というもので、「気持ちが悪いもの、不快に思うもの」と「かわいいもの、繊細なもの」が合わさったものである。



写真3 「カワイイ」 in 原宿
撮影：シモニア・フクエ

原宿には二回行ったが、残念ながらロリータファッションの少女たちを見つけインタビューすることはできなかった。

ロリータファッションに見られるこの美的価値観は村上隆や奈良美智の作品に表現されており、時には可愛げのあるキャラクター、時にはグロテスクなモンスターたち、そして反抗的な子どもたちなどに表現されている。

バサラについての美的価値観に関してそれまでは、きわめて少ない理論的な知識しか持ち合わせていなかった。それは私の研究成果の目標が十分に達成されていなかったからである。この研究に対して最も完成された作品を出したのが芸術家の天明屋尚である。彼は2010年に「BASARA展」を開催した。私はこの研究の知識を増やすためにミヅマアートギャラリーを訪れたが、そこで見つけた情報はすでに私が得ているものであった。

奈良美智と村上隆の二人の関連性を調べるにあたり、Blum & Poe Tokyo ギャラリーのディレクターの久保玲奈さんと横浜美術館の学芸員の内山淳子さんにはこれら二人の美術様式について非常に丁寧に説明していただいた。奈良美智のアートは内観的な表現で、村上隆は商業的な要素を含んでいるということだった。

私は今後の研究のため、チューターの高森美憂さんに同行してもらい、国際的なマンガイベントに足を運んだ。同人誌というものは、ヨーロッパの影響と、日本の伝統的なマンガの生き生きとした構図によって作られたのではないかと私はそこで気付いた。これは明治大学の「米沢嘉博記念図書館 まんがとサブカルチャー」の教授、斎藤宣彦氏さんとマンガ研究者の野田謙介さんと親切な通訳と説明をしてくれた佐々木みつ希さんによって、ある程度立証された。

今回の私の研究結果として、「バサラ」と「かわいい」という美的価値観は、奈良美智と村上隆の作品だけでなく、日本社会と文化全体に影響していることが分かった。



写真4 海外マンガフェスタで購入した同人誌
撮影：シモニア・フクエ

民俗と生活 —日本訪問時の見聞と感想—



鄧苗
(北京師範大学民俗学与文化人類学研究所)

日本での訪問期間中、日本の民俗文化を調査し、初

歩的な研究を試みた。また、日常生活を通して日本の



文化とライフスタイルも体験できた。

日本で最初に訪れたのは埼玉県の秩父市である。私はチューターとともに秩父の民俗祭礼である秩父夜祭について、二日間にわたって調査を行った。具体的な内容は別の報告書を作成したため、ここでは触れないことにする。



写真1 国立歴史民俗博物館の入口

二番目に訪れたのは千葉県にある国立歴史民俗博物館である。国立歴史民俗博物館は日本最大の博物館といわれ、非常に広い。博物館の立派な建物の外、周りの自然風景もとても秀麗だ。見学の時、博物館教授の松尾恒一先生がわざわざ館内の案内と解説をしてくれた。特に民俗関係の第4展示室にある展示物はとても豊富で、古代から現代まですべて網羅している。実物の展示以外に、映像を流しながら紹介するものもある。人々は見学のついでに古い民俗音楽も耳にすることができ、楽しい見学に陶酔する。



写真2 宝秀寺の近くにある墓地の一角

三番目に行ったのは私が泊まった横浜白楽寮の近くにある六角橋宝秀寺の共同墓地である。墓地は全体的に静かで穏やかな雰囲気が感じられる。中国の都市にも共同墓地があるが、私は実際に行ったことがないため、どんな様子かはわからない。ただ、ここで断言で

きるのは、中国の墓地はほとんど寺院の近くに設置しないことと、墓地に仏像を置かないことである。

次に述べたいのは、人々の生活習慣及び地元横浜の町の風景である。私が注目したところはいくつかある。一つはゴミの分別について。日本ではゴミの分別を推進しているため、町中どこもきれいに保たれている。最も印象に残ったのは、秩父夜祭を調査した時、あれほど大勢の観光客がいたのに、地面などはあまり汚れていないことである。中国の廟会（日本でいう縁日）など祭に似た場面なら、現場はきっとゴミだらけになるだろう。もう一つは日本人の礼儀正しいところである。コンビニエンスストアにせよレストランにせよ、また他のところでも、会った時や別れる時に人々は互いにお辞儀をしよう。日本民族はこのやり方をもって礼儀の真髄を日常生活に滲ませる。最後の一つは地元横浜の風景である。ここは繁華街であり、商業的な景色が素晴らしい。店舗の装飾は人々に心地よさを感じさせる。六角橋にある数軒の中華レストランも中国の風情が感じられる。



写真3 泉岳寺での儀式

最後に見学したのは東京にある泉岳寺である。私はチューターとここで義士祭を見学した。義士祭は毎年12月14日に行われ、13日には前夜祭もある。14日の本祭を見に来る観光客が非常に多い。この日の目玉は義士墓前供養である。仏教僧侶の衣装を着ているお坊さん達が墓前で読経する。この他に、たくさんの人が寺の敷地内にある墓地に行ってお参りし、墓碑を洗っていることに気付いた。おそらくこの大切な日に、これらの人々は亡くなった親族への恋しい思いに誘われるのだろう。

短い二十日間で日本文化との接触は本当に限られたものであったが、秩父夜祭をはじめたくさんの事柄に非常

に興味を湧いた。今回の旅はさらに深く掘り下げて研究する機会・時間がなかったけれども、日本文化の種はず

でに私の心の中で根を下ろして芽吹いたと確信している。次回の日本への旅を大変楽しみにしている。

日本における「筆談」に関する調査



謝咏
(浙江工商大学東亜研究院)

2015年12月6日ー25日、神奈川大学非文字資料研究センターからの招へいで、若手研究員として横浜へ向かい、20日間の研究調査を行った。指導教授の小熊先生及び事務室の成田さんを始めとする関係者の皆様から多大な支援をいただき、円満かつ充実した調査ができた。20日間で主に「筆談」に関する調査を行った。非文字資料研究センターの研究室と神奈川大学図書館では、学内のデータベースを通して論文検索を行い、論文と書籍に目を通した。国会図書館と東京都立中央図書館では資料収集などを進めた。

ある事実に気がついた。それは、音声がないため、文字による意思表示が不十分な場合、当事者は往々にして筆談用の紙に図形を書くということだった。

たとえば、日朝間の筆談記録『朝鮮漂流日記』には、7巻の原稿に、81点の彩色挿絵が描かれている。それは地理や方角などをあらわすための地図や地形図のみならず、港口・船舶・人物・衣冠・器具・文房具・武器など多岐にわたっている。地図、地形図、港口(28枚)、船舶(5枚)、人物と衣冠(14枚)、農具、文房具、武器等(19枚)、天候(6枚)、食事(5枚)、その他(処罰、行列)(4枚)なども描かれている。



写真1 小熊教授の案内で常民文化研究所を訪問した

東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、言語や民族そして文化の障壁を超越して共有される漢字漢文の筆談は中日間のみならず、朝鮮半島や近世の琉球及びベトナムでも同様にみられる。したがって、千年を越える東アジア地域

の交流のなかには、多くの筆談文献が今なお残されているのである。

しかし中国国内では、資料に限りもあり、また筆談はあくまでも文化を超える交流で、相手国の資料に関する調査が必要になったため、今回の機会を利用して、下記のとおり行った。

1. 王勇教授率いる研究グループに参加

週に一回「筆談研究会」で原資料を輪読しているうち、

文章内容の理解を助けるために挿し入れた絵はコミュニケーションの役割も果たしているが、主な原因としては漢文に熟練していない著者の安田氏は、自分が得意な絵を使い、朝鮮の地方官僚からの度重なる検問に対して解釈を行い、徐々にお互いの理解を得て、また漢文のレベルの向上に伴い、徐々に筆談が展開するようになっていった。その後、対馬の倭館へ向かう途中も、地方官僚や船頭さんに尋ねながら、所在地の確認もでき、路線図もかなりの部分を作成することができた。筆談の文字部分が忠実に原稿にあらわされ、自分が得意な絵(スケッチ?)に丁寧に色彩をつけ、編集を行ったのだと推測した。今後とも視覚による筆談交流は東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、ただ単なる意思疎通以外に、東アジアの文人の精神世界をいかに動かすか、場合によっては、文字以外、絵なども重要な役割を果たしたと認識すべきだと思っている。

2. 「千歳丸」の乗員である名倉松窓に関する資料収集

幕末最初の訪中団である「千歳丸」の乗員の紀行文を数多く解読してきた。中でも、「千歳丸」の一員である名倉松窓に関する研究は中国ではほとんど扱われてこなかった。彼はメモ魔と称されるほどの膨大な筆談資料を残し、その筆談を通して、清国の官僚、商人、文人と幅広く人脈をもち、李鴻章からも好評を得て、「中日修好